

日本社会学史学会大会

渡 邊 秀 司

1999年6月27日に、日本社会学史学会大会が行われた。共通テーマとして〈20世紀社会学を総括するー確立期の社会学ー〉と言うテーマでシンポジウムが開かれた。以後三年間で現代の社会学，そして21世紀の未来へ向けての社会学を模索するという大きな試みの端緒として，今回20世紀社会学を総括しようと言う訳である。まず最初と言う事で，ジンメル，デュルケム，ウェーバーについての発表が行われた。

まず「ジンメルと20世紀社会学」と題して発表が行われた。様々な社会学者達によるジンメルのプロブレマティークな「読み取り」の跡をたどるという視点からのアプローチであった。50年代から70年代にかけてのジンメルの読み取りを中心に，ジンメル研究の動向について述べられていた。次のデュルケムの発表ではデュルケムの『社会分業論』『自殺論』『宗教生活の原初形態』と言う代表的な論文を題材に，デュルケムの分析の社会学的側面についての考察をしていた。『分業論』では近代の「機能分化」の側面を，『自殺論』では近代の「個人主義」の側面を，『原初形態』では近代の「集合的観念・価値・感情」の側面を浮き彫りにするというものであった。次にウェーバーの研究動向について70年代の研究動向を踏まえながら，ウェーバー社会学の理論構造とその特質について述べられていた。各発表者の発表の後に，討論者と発表者による質疑応答が行われ，活発な意見交換が行われた。

このような学会の参加は初めてであったが，様々な示唆を得ることができた。ジンメル・デュルケム・ウェーバーと言う理論の大家達をどのようにこれからの社会学に生かしていくべきなのか，現代社会学に与えた影響はどのようなものであったのかを，再度認識することができた。私自身はただ感心して聴講するのみであった。2000年は現代社会学と称してさらに現代の社会学について20

世紀最後の総括を行うそうである。